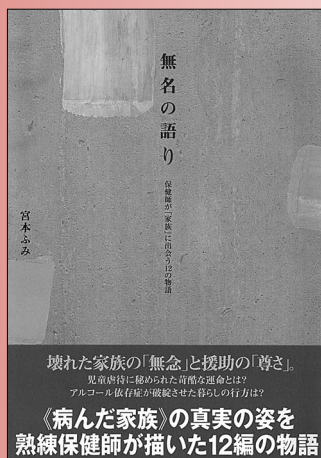


人はどのようにして生き、死んでいくのか、 生の重さを綴る物語

【評者】平野かよ子 国立保健医療科学院公衆衛生看護部

無名の語り 保健師が「家族」に出会う12の物語

宮本ふみ(著)



定価 1,890 円 (本体 1,800 円 + 税 5%)
A5判, 224 ページ
医学書院 (Tel.03-3817-5657)

この著書は 16 年間という必ずしも長くはない保健師経験をされた宮本ふみさんが、予後の悪い病と自らが宣告されたなかで、実践現場の楽しさやすばらしさと、1 人ひとりの生き様の重さについて、まさに命を懸けて語ってくれたものである。

朝出勤してどのように 1 日が始まるのかといった保健師の日常をリアルに描き、初学者の保健師や一般の方にぜひ読んでほしいものであるが、それだけではない。どの事例もある意味では複雑困難な事例であるが、事例に対峙する宮本さんの姿勢や対象の理解と洞察の鋭さ、関わりのタイミングの巧妙は、まさにベテラン保健師のあり様も伝えている。

語られた事例のいくつかの結末は、事例の死である。ふみさん自身が強い治療の副作用に耐え忍び、自らの死を思いながら、保健師活動への熱い思いを冷静に書かれていることを思うと、この著書の大きさをどのように伝えたらよいのか、戸惑うばかりである。

地域でさまざまな苦悩や困難を抱えて生活する人々を支えることは、到底保健師 1 人の力でできるものではなく、支援スタッフ以外にも身近なさまざまな人が加わったケアネットワークなくしてできるものではない。この支えの輪をつくることに保健師の活動の本質がある。彼女はそのことを、事例をとおして伝えてくれている。また、地域で生きる人々のあり様として、「素朴な人が天地の知恵を手に入れたときは強靱である。実生活から紡がれた知恵は、専門家が提供する知識に優る」が、「いくら強い人だって、自分の存在を評価して労ってくれる人がいなければ、いつかは疲れ果てる日がやってくる。ときには愚痴をこぼし、ため息をつきたいだろう。そんなちょっとした逃げ場があって、人は明日への気力を再び持つことができるのだと思う。誰もがそんなふうに支えられている」と書いている。

そして、彼女が心底伝えなかったことは、人はどのようにして生き死んでいくのか、そして、とくに何重もの苦悩を負わされて生きる名もない市井の人、1 人ひとりの生の重さだと思われる。障害の子どもをもちながら神経難病で亡くなった事例では、「彼女の無念を、人知れずひっそりと逝ったその生の重さを、沈黙の闇に沈ませたくなかった…課せられた過酷な運命と戦う力を奪われ、動かなくなる身体で事の成り行きに身を任せることしかできずにいた彼女は、わが無力さを突きつけられただけではないか。私は、彼女の話の聞くことしかできなかった…背負いきれない不条理をその小さな体に背負って(彼女が生きてきたこと)を証言すること、それが彼女に関与させていただいた者にできるせめてもの感謝のしるしである」とまとめている。

ふみさんは、この事例と自分とを重ねていたのではないだろうか。初心であつたジャーナリストであることを、彼女は、保健師であることをとおして実現されたのだと思う。ふみさんが保健師という職業を選択してくれたことに限りなく感謝したい。